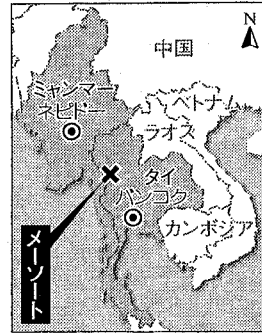


日本の人権擁護団体が2月、ミャンマー(ビルマ)軍政の弾圧からタイに逃れた難民の置かれている状況を現地調査した。ジャーナリストの長井健司さんが取材中に射殺されてから5カ月。ミャンマーで市民は依然、圧政に苦しみ、反軍政の少数民族組織の指導者は「日本人に私たちの置かれている状況を理解してほしい」と言葉を託した。

(鈴木伸幸)



# 人権団体、難民キャンプ調査

## ミャンマー軍圧政逃れタイへ

# 命懸け 反政府運動

「ヒューマンライツ・ナウ」の事務局長で弁護士伊藤和子氏ら五人の調査団は二月七日から一週間、タイ西部の国境地帯の町メーソートや少数民族カレン人難民のメラ・キャンプを訪問した。

メーソートでは、反軍政デモに参加した僧侶七人と市民八人の計十五人をインタビュー。僧侶たちはパゴダ(仏塔)で祈りをささげ、別のパゴダに団体で移動、それを市民が取り囲むように歩いて、デモ行進をしていたという。

デモは昨年八月中旬から始まり、各地で規模が拡大。軍政は同九月下旬に一気に武力制圧にかかり、多くの身柄を拘束したという。目の前で、デモ参加者が射殺されたと証言した市民もいた。

調査に参加した「ビルマ

## 受け入れ少ない日本へ批判も



軍政の弾圧から逃れてタイで暮らすミャンマー難民ら。タイ西部のメラ・キャンプで(ヒューマンライツ・ナウ提供)

市民フォーラム「事務局長の目的についてマン・シーの事務局長で弁護士伊藤和子氏は、ヤー氏は「軍政から出され追害を受けている少数民族の間違った情報を信じないの反政府組織「カレン民族同盟(KNU)」のバドゥー・マン・チャー事務局長と二月十一日にメーソートの自宅で会見した。

KNUは四年半ほど前に日本支部を設置したが、その会見からわずか三日後の十四日夜、マン・シー氏は自宅で複数の男たちに暗殺された。男たちの身元は不明。ロイター通信はこれを打撃し、英BBC放送も「カレンの反政府運動に大きな打撃」と伝えた。

渡辺氏は「反政府活動が命懸けであることを再認識した。非常に残念」とコメント。特に、インタビューした場所からほんの数分の所で殺害されたことがショックだったという。

難民キャンプは約四万人のカレン民族であふれていくという。そこでは、英国やフランスの非政府組織(NGO)が食料などを支援しているが、生活は最低限のレベルだ。

現地調査した伊藤氏によると、カレン民族は軍政に強制労働に駆り出される一方、反軍政武装組織にも強制徴用されるなど、一般家庭が軍政と同胞の両方から苦しめられる現実がある。

レイプ被害も多い。また、ビルマの民主化でも、アジアのリーダーとしてやるべきことはたくさんある。政府はもっと現実を目を向けるべきだ」と政府の対応を批判した。

LINEKS追跡